

町にかけて盛に行はれ遂に一家をなして、本座・新座などといふに至つた。

【調伏】 心・口・意の三業を調和して諸惡を制伏す。

【率塔婆】 ソトバ。(1)塔に同じ。(2)長方形の板に刻を入れ、塔の形を摸し、經文・戒名などを記して供養するもの。

【頭陀】 梵語 Dhuta の音譯。杜茶・杜多などとも譯す。

音譯は抖擻・抖擻・洩汰・洩洗。衣食住の貪着を拂ふ行法であつて、無一物となつて修行に出、道々に食を乞うて行くこと。又その僧。こゝは後の意。

【有爲轉變】 ウキテンベン。因縁が和合することによつて生ずる諸法——生・住・變・滅の四相は變化極りないものである。

【柏崎】 (かしはさき) に。

『つらく世間の幻相を觀するに、飛花落葉の風の前には。有爲の轉變をさと。電光石火の影の中には。生死の去來を見る事始めて驚くべきにはあらねども。幾世の夢とまとはりし。假の親子の今をだに添ひはてもせぬ道芝の。露のうき身の置き處。云々』

【一切の傳説・歌話・物語・戰記物語は擧げて佛教の中に攝取せられたるなり】 謡曲は謡曲が成立したと考へられる室町時代以前の古典及漢土の古典にあらはれてゐるが、それらの第一次的の文學に於て、常識的に不滿な點、遺憾

残念な點、痒いところにとゞかぬ點——即ち文學の效果として殘されたものを、常人の満足するやうに解決して第二次的の作品となり、その満足の氣持を佛教々理によつて助成してゐる。(以下の諸例の冒頭)

【天魔も鬼神も皆佛力に敵し得ず】

『橋供養』(はしくやう)は頼朝が建久九年十二月、相模川の橋の落成式に出かけて行つたが、歸途落馬して、明るる正治元年正月十三日、それが死因となつて逝去したことを題材として、その日一天俄かにかり曇り、箱根山には電光が見えるといふ大暴風雨となるや、能登守教經の亡靈が猛り出で、頼朝にとつてかゝるので苦宮の別當が陀羅尼を祈ると、不思議や東の空から化鳥があらはれて、亡靈を蹴立てる。

【鶴】 (ぬえ)は源三位頼政の爲めに射落された鶴が施僧に供養されたのむ。

いと誓つて虚空に消え、命も雲居に上り給ふ。

【黒塚】 (くろづか) (一名安達原) 東光坊祐慶は行ききれて一夜の宿をかると、そこは鬼女の家であつたが法の力に依て調伏する。

【車僧】 まく(るぞう) 車僧と太郎坊との争。車僧がまける。

【紅葉狩】 (もみぢがり) 維茂が八幡大菩薩の威徳によつて鬼女を斬る。

【殺生石】 (せつしやうせき) 玉藻前の化身、殺生石が玄翁和尚の供養によつて成佛する。

【船辨慶】 (ふなべんけい) 義經が頼朝の怒りをうけたので、大物の浦に乗船して西國に赴かうとすると平家の亡靈が出てくるが、辨慶の祈りによつて退散する。

【草木國土一切成佛を遂ぐるなり】

『杜若』(かきつばた)は伊勢物語に業平が東下りの折、參河の國八つ橋の杜若を賞でたことがあるのを題材にして、杜若の精が出て昔物語をし、旅僧の供養をうけて悟りを開く。曲の最後の文に

『すはや今こそ草木國土。悉皆成佛の。御法を得てこそ失せにけり』

とある。非情の杜若につけて、國土を一緒に出したのであらう。

【鐵輪】 (かなわ)は男に裏切られた女が怨の焰を燃やし、せめてもの腹癒せには鬼になつて、その男をくひ殺してやらうと貴船明神に祈を籠めて、夢告の如く身には赤い衣をつけ、顔には丹をぬり、頭には鐵輪を戴き、三つの足に火を燈し、怒る心を持つてゐると果して鬼になることができたので、男の寢所に忍び込みいざこれより男の命を取らうとすると、かねて祈念の幣帛に三十番神があらはれたので、怪異は暴威を振ふことができず、通力さへ失つてしまつた。

【第六天】 (だいろくてん)は太平記に文治の頃、洛陽に解脱といふ上人があつた。この世になき道心堅固であつたので、印度の魔王第六天も一時帝釋天を敗つたが、永久の勝利を得ないのは日本にこの解脱上人がある爲めであるので、何とかしてこの上人を墮落させたいと考へた末、時しも勃發してゐた承久の役に、義時に味方して北條が勝つならば、後鳥羽院は御遠島の上、新帝廣瀨の院第二の宮の御順番故、この上人はその宮の御歸依なればやがて朝廷の親任を得、權勢を加へて修業を怠るであらうと考へたのを題材として。解脱上人が伊勢の大廟に參拜すると俄かに大空さえかへり、風雨雷電はげしく、六種の震動をなし、佛舎破却の第六天魔王があらはれ、悟りの道を妨げようとするので、上人は合掌觀念すると、不思議や天つ空より素盞鳴命があらはれ寶棒を以つて打ちのめすと、以後はこの土にこな

○ 『弱法師』(よろぼふし)には俊徳丸の袖に散りかゝる籬の梅の花に就いて『草木國土。悉皆御法も施行なれば。皆成佛の大慈悲に漏れじと。云々』

○ 『殺生石』(せつしやうせき)にも『木石心なしとは申せども。草木國土悉皆成佛と聞く時は。本より佛體具足せり』

○ 『遊行柳』(ゆぎやうやなぎ)は一通上人の流をくむ遊行上人が奥州白河の關にきかると、道案内をするといつて出てきた老人は名木朽木の柳の精であつて、上人の供養をうける。

○ 『雪』(ゆき)は雪の精が女と化けて出て、雪路を攝津の國、野田の里にかかる旅僧に供養をうける。

○ 『杜若』の場合は化生神話の系統を引いてゐるが、何れにしても非常のもの、精を認めてゐる點に一致がある。これを佛教的に見れば宇宙の諸法に佛性があるといふ佛性論であり、文學的に見れば擬人化である。謡曲が幽霊を出したり、亡霊を出したり、唐漢土の傳説をとつたり、

又このやうに非常の精を出すことは舞臺演出の上に立體的な多面的な世界をもち上げる爲めの技巧であるやうに考へられる。

○ 『祇園精舎』 祇園園林須達精舎。祇園大寺の園林を須達といふ人が買ひとつて釋迦のためにたてた精舎。

○ 『奢る平家の久しからざる』 平家物語、卷一、祇園精舎【盛者必衰の理を知らしめん】の條にある句。

○ 『親子夫婦の生別を根本とし……しかも其の最後に於ては佛神の加護の爲に再會邂逅(する)』

○ 『隅田河』(すみだがは) 最愛の子梅若をさらはれて狂となつた母。隅田河に至れば梅若既にこの河のほとりに死すと聞く。念佛の内に梅若の聲と幻あり。

○ 『花月』(くわけつ)は一子花月を天狗にさらはれた九州の人、左衛門次は出家して諸國行脚して歩く内に京都、清水にてその子に巡り會ふ。

○ 『飛鳥川』(あすか)は突然行方がしれなくなつた母を慕ふ一子友若が従者につれられて、祈りの爲に三吉野に參詣し、歸途飛

鳥川にさしかゝり、折しも五月雨の頃とて水まん／＼たる田面に笛鼓に合せて田歌を謡ひ、田植をしてゐるのを眺めてゐると、一人の田植女が出てきて飛鳥川の淵常なきことを語るが、その女は別人ならず、友若の尋ねる母ぢや人であつたので再會の喜を爲す。

○ (夫婦の場合)

○ 『女郎花』(をみなへし)は昔平城天皇の御代に男山に住む小野頼風に契つた京の女が、後に男を尋ねて八幡に行き、頼風のことをきくと、もう別の女がきてゐること故、怨と悲しみとの餘り、八幡川に身投げをしたのであるが、その時脱ぎ捨てた山吹重ねの衣朽ちて女郎花となつたといふ傳説を題材として、九州の僧が都見物に上る途中、男山の麓に今を盛と咲き出でてゐる女郎花を賞でゐると、花守といふ老人が出てきて、女郎花といふ名に關係した問答をし、中入後は女郎花の夫婦があらはれ、女の方は浅はかにも身を投げたことを悔い、今は劍の山の苦しみをうけてゐるから、罪を浮べてくれとたのむ。

○ 『往生院』(わうじようゐん)は新田義貞の妻、勾當の内侍は夫の後を尋ねて越前までも出かけたが、夫はもう戦死したときいて、京に歸り嵯峨の往生院に夫の冥福を祈つたといふ太平記の物語から題材を得て、京見物の上野の僧が、嵯峨まで行つて日がくれ、一軒の賤が屋に一夜の宿をたのむと、その屋のあるじが内侍の亡霊であつて、義貞戦死の事情を語り僧の供養に眞

如の月をうる。

○ (親子夫婦の場合)

○ 『柏崎』(かしはぎ)は越後の國・柏崎の領主が訴訟のことで鎌倉に行つてゐる内に、かりそめの風がもとで病歿し、連れて行つた一子花若は父の冥福を弔ふ爲めに家出してしまつたので、領主の妻は一時に夫・子に別れ悲歎のあまり狂亂して善光寺にまゐり夫が西方淨土に往生するやうにと一身に祈願をこめてゐると、不思議や、出家姿の花若の妻があらはれ、美しと思ふまに、そこは岡原で、伏屋に生ふる簾木のみであつた。

【不和・讒言】

○ (夫婦愛と親子愛と不和)

○ 『嫉捨』(をばすて)は大和物語に信濃國、更科にすむ男がその妻の言に動かされて、母の如く自分を育てゝくれた伯母を更科山の月明き夜、山の嶺に捨てゝきた傳説を題材として、捨てられた老女の亡霊が旅僧にあつて、昔の傳説を物語り、正體を現してからは昔の怨をのべ、中入後は西方淨土を祈る。

○ 『舞車』(まひぐるま)は親の爲めに仲をさかれた男女が、遠江の國、見附の國府にて祇園會にあひ、東西に分れて、大磯の虎が祐成に名残を惜むさまを車の上で舞つて見ると、それが戀人同志であつた。

○ (親子の不和)

○ 『丹後物狂』(たんごものぐるひ)は丹後の國、白絲の濱にすむ岩

井何某は一子花松を成相寺に上せて學問させておいたが、ある日寺から呼びかへして學問は如何ほどできたかと聞くと、まだ法華法師品・内典には俱舎論の内七卷は覚えてゐないが八撥が上手になつたといつたので、大目玉を頂いて勘當された。花松は悲しみの餘り、橋立の浦に身投げしようとしてゐるのを、九州の人に助けられ、伴はれ歸つて、彦山にのぼせたところ、遂に學問の奥儀を極めた。さて國の父母戀ひしと尋ると父も我子戀ひしと尋ね歸ると父も我子戀ひしに狂ひ出たので、花松は郷里に七日の説法を行つてゐると、はからずも父にあふことができる。

◎ (三角關係——嫉妬)

『藍染川』(あゝめがは)は梅壺の侍従といふ官仕への女が、太宰府の神主中務頼澄といふものが在京の折、契つて設けた一子梅千代を伴つて遙々九州へ下つて見ると、そこには別の妻があつて碌々夫にも遣はしてくれないので、梅千代を残して藍染川に身投げした。何も知らないで通りかかつた神主は、それが京に契つた女であり、傍に泣きさけぶ子であるのに吃驚し、一生懸命にお祈りすると、天神様のお力によつて蘇生した。

◎ (讒言)

『弱法師』(よろぼふし)は河内の國、高安の里に住む左衛門尉通俊といふもの二子俊徳丸は讒言によつて勘當され、乞丐人となつてさまよふ内、盲目とさへなり、果は發狂してゐたところその父も流石後悔の涙にむせび、せめてはその子の安樂を祈ら

んものと天王寺に參詣すると、はからずも俊徳丸にあひ、父の名のりを上ぐれば逃げるを捕へて我が家へ歸る。  
(この曲には旅僧は出ないが、天王寺に參詣した功德によつて父子が再會するのである)

◎ 『高安小町』(たかやすごまち)は小野の小町が朝廷の歌合せのとき、衆議判であつたので、帝の御歌をさんぐに申したといふ讒言により、河内の國、高安の里に籠居させられたが、その道すがら男山八幡宮に祈をこめて行つたので、間もなく、歸洛の繪旨を下された。

【狂亂に陥れるもの多し】特に『狂女物』といふのがある。

【會者定離】エシヤチヤウリ。世の慣ひとして會するものは必ず離れる。遭ふは別れの始めである。この思想も盛者必衰の思想と同じく平家物語の基調をなしてゐる。

『生者必滅、會者定離は浮世の習にて候也云々』(卷一〇、維盛入水の條)

佛典では

遺教經に『世皆無常、會必有離』

涅槃經に『夫盛者必有衰、合會有別離』

未生怨經に『盛者即衰、合會有離』

【主想】 主なる思想、理念、觀念。

【妄執】 マウシフ。虚妄の執念。虚妄の法に執着すること。迷ひに執はれること。成佛ができない。

【妄執の未だ去らざる古英雄佳人】 一二の例を示せば

曲名	シ	テ	ワ	キ	成佛の手段
碓 潜	平知盛	旅	僧	法華	經
生田敦盛	平敦盛	法然の弟子	敦盛の子	賀茂	明神
朝 長	太夫進朝長	清涼寺の僧	觀音	懺法	
知 章	平知章	旅	僧	旅僧	の 弔
笠率都婆	平重衡	旅	僧	未だ成佛するを得ずして盛に救ひを求む	
頼 政	源三位頼政	旅	僧	旅僧	の 讀經
忠 度	薩摩守忠度	旅	僧	旅僧	の 弔
東 北	和泉式部	東國の僧	譬喻	品	
巴	巴(里女)	旅	僧	旅僧	の 弔

【未死の魂魄】 これは前述の如く、常人の考へて不満足に思ふところの、即ち文學の効果の部分であるが、それを常人が本人の心になつて見ると、どうも成佛できないと考へるのである。

【佛知識】 佛教の知識を具へた人。僧。

【佛果】 成佛の果、果は完成の意にして、萬行の所成をいふ。無念・不本意のまゝ死んだ人々の魂魄が行脚僧の供養によつて成佛することをいふ。

節 意

第一節 「能樂の生命も亦こゝに在り。」まで。能樂の素樸單純なこと。

第二節 「……之を發見し得べきなり。」まで。謡曲の文辭の特色。

第三節 「……見做さざるべからず。」まで。謡曲文章の妙味。

第四節 「……舞臺の上に現はしゝもののみ。」まで。謡曲の中の神事關係のものについて。

第五節 「……徑路を示すものとす。」まで。複式能と神事祝言。

第六節 「……技術上の目的に出づるなり。」まで。複式能の形式の説明。

第七節。終まで。

謡曲の本質としての佛敎的の意義。  
**参考**

謡曲に關する参考書一覽(概略を示す)

一、註釋書類。

謡古抄。著作年代及び編者不明。

謡抄。林道春。十冊。

諷増抄。加藤盤齋。寛文元年の序あり。

法音抄。僧惠空。正徳四年五月開板。五卷。

◎謡曲拾葉抄。乾貞恕。惠南。明和九年開板。二十

卷。(國文註釋全書、所收)

謡曲新評。増田于信。明治二十四年。二卷。

謡曲通解。大和田建樹。明治二十五年。合本もあ

る。

校訂謡曲叢書。芳賀、佐々木兩博士。三冊。

謡曲大鑑。齋藤香村。

◎謡曲大鑑。佐成謙太郎。昭和五年(目下刊行中)七

卷。

二、解題書類

古今謡曲解題。丸岡桂。大正八年十二月。

謡曲物語。和田萬吉博士。

三、辭典類

能樂大辭典。正田章次郎、雨谷幹一編。明治四十

年。

謡曲辭典。大町桂月監修、峰谷時順編述。大正十三

年。

四 研究書

◎世阿彌十六部集。吉田東伍編。

同

野々村戒三校訂。

口譯世阿彌十六部集。池内信嘉。

申樂談義(岩波文庫)野上豊二郎校訂

花傳書(岩波文庫)同上

能本作者註文。吉田兼持。大永四年の奥書あり。

二百十番謡目録。觀世元章。明和二年。

禪竹集。金春禪竹。

能樂全史。横井春野。大正六年十二月

◎能樂盛衰記。池内信嘉。大正十四・五年。

日本歌謡史。高野辰之博士。大正十五年。

◎能、研究と發見。野上豊一郎。昭和五年。

能樂禮讚。戸川秋骨。昭和五年。

尙近頃の刊行としては

博文館の謡曲叢書、三冊

有朋堂文庫の謡曲 二冊

國民文庫本の謡曲集 二冊

校註日本文學大系本の謡曲集 二冊

江戸文藝叢書の謡曲三百五十番集 一冊

謡曲文庫十二冊等がある。

又、觀能用としては大和田建樹の「能之葉」(六冊)は  
便利である。

## 二六 月は世々の形見

室 鳩 巢

### 作者

室鳩巢 ムロ キウサウ。

儒學者。江戸の人、名は直清、小字は孫太郎、字は師禮、一字を汝玉といひ、通稱は順祥、のち新助といふ。幼にして聰悟、神童と稱せられた。加賀侯祿を給して京都に往き木下順庵の門に學ばしめた。貞享三年加賀に徙り廢屋を買ひてこれに住し、扁して鳩巢といふ。依つて自ら號とした。「大學新疏」を著し、又「義人傳」を編む。當時赤穂の遺臣に對する議論儒者に異同あつたが、鳩巢は斷然義士を以て之を目した。正徳元年、新井白石の薦により、幕府の學職となる。正徳三年邸を駿河臺に賜つた。人呼んで駿臺先生と稱す。吉宗統を繼ぐや擢でられ侍講となり屢、政治を諮詢せらる。嘗て命を受けて「六論衍義大意」を著す。幕府刻して天下に布かした。嘗て論孟中庸及び易經廣義を著す。未だ校訂に及ばずして歿し、後病に罹り稿を屬することができなかつた。家居休養、

駿臺雜話を著す。享保十九年八月歿す、年七十七。著す所、上記の外「周易新疏」「中庸新疏」「西銘詳義」「大圖述」「五常五倫義」等あり。(二三一八—二三九四)

### 出所

駿臺雜話、シュンダイザツワ。(或はスンダイザツワ) 五卷。室鳩巢の著。

學術・道徳に關する一種の隨筆で、享保六年の春から冬に至るまで、著者が講論の餘を以て門生の間に應じた雜話を、翌年春から筆を起し、秋に至つて稿を了へ、將軍徳川吉宗に上つたものである。

本書は、當時伊藤仁齋・荻生徂徠等の諸學者が妄に程朱を詆譏して憚る所のないのを慨き、朱子學を發揮して邪正を辨じ、學問の大綱を明かにし、又世俗の諺・淺近の語に寓して諸生を戒め、兼ねて學者をして歸嚮するところを知らしめたもので、卷を仁・義・禮・智・信の五常の目に分ち、末に「壬子試筆の詞」一篇を附した。

初から組織を立て、書いたものではないが、各條自ら關聯があり、其の文章は和漢混和體で、普通文の模範と稱せられる。殊に儒教の異説を辨じ、仁義の大道を説くあたりは、高遠で錯綜した義理を論ずるに平易通俗の文を以てし、しかも筆力が遒勁、文辭が明晰で、容易に他の追隨を許さぬところである。

本課は卷五（信集）のはじめにある「月は世々の形見」を採録されたものである。

作意

月の詩的鑑賞を述べようとしたものである。そのためにまづ月についての通俗的な淺薄な考へ方を排除し、純粹に、月そのものの美に沈潛し、やがて萬物の眞理にまで透徹することを述べようとしたものである。

解釋

【いつしか秋のけしき】 いつの間にか秋らしくなつてきた。

新古今集に「いつしかと萩のはむけのかたよりにそそやあきとぞ風も聞ゆる」

「あさぼらけ萩のうはゞの露みればはやはださむし秋のはつ風」

【がり】 「の許に」のところに「の意、翁がり・母がり・妹がりなど用ふ。」

【此のほどの老のねざめ云々】 この頃の秋の夜長の寢覺はさぞかし徒然であらう、打ち案じて人々が尋ね来たといふのである。

夫木抄に「夜やさむき月やすゞしき明方のおいのねざめに風ぞ身にしむ」

【薄酒】 ハクシユ。香味のうすい酒。又わるい酒。こゝでは粗酒を一盞差上げようとの意。

蘇軾詩に「山城薄酒不堪飲」

故事成語考に「魯酒茅柴皆爲薄酒」

【清談の露云々】 秋の夜も更けて、草葉の露のしげくおくことを、談話の次第に濃やかに佳境に入りゆくに掛けて云ふ。杜甫の詩に「清談玉露繁」とある。又清談の徒など云つて、老莊の説を喜び禮儀を輕んじ、放逸を事とする者を云ふこともあり。こゝは名利に離れて道を語る

を清談と云つたのであらう。

【あるじまうけ】 饗應すること。

【青天有月來幾時】 この詩は李白全集卷二十「把酒問月」青天にはいつも月はある。しかし雨・雲・霧の爲め又は虧損によつて見えないことが多い。一體一月に何度位我々に見えるのであるか。

【我今停盃一問之】 我れ今、盃を停めて一に之を問ふ。酒がやゝまはつて、詩興が起る。やをら盃をおいて、面ほてりした顔を見上げて、月の面をじつと見る。

【人攀則月不可得】 人は明月に攀ぢんとして、得べからず。月にあこがるゝ心は嵩じて、明月の世界に行つて見たい。心となるが、それは不可能なことである。

【月行却與人相隨】 月は行きて、却つて人と相隨ふ。月は青天を浮動して、人行けば月又隨ふ。

【皎如飛鏡臨丹闕】 皎（ケウ）は飛鏡、丹闕に臨むが如し。明月皎々として、而も晴天を浮動するさまは宛も玲瓏たるます鏡が天宮の門闕に臨んでゐるやうである。

皎と鏡とは同じ聯想の上にて、皎鏡といふ。

謝朓「方池含積水。明月流皎鏡」

丹闕は天宮の門闕

唐太宗の詩に「爽氣浮丹闕。秋氣澹紫宮」

郭道之の詩に「度青宵而匪除。匪疾。向丹闕而乍合作分」

【綠煙滅盡清輝發】 綠煙、滅し盡して清輝發す。

天空に漂ふ雲煙は夜が更けゆくまゝに散じ失せて、月光がいよゝ／＼冴えてくる。

綠といふのは感じの上。

【但見宵從海上來】 但見る、宵は海上より來る。

【寧知曉向雲間沒】 寧ぞ知らん、曉は雲間に向つて沒せんを。

【白兔搗藥秋復春、姮娥孤棲與誰隣】

白兔藥を搗きて、秋復た春。姮娥孤り棲みて誰と隣する。

白兔が月中にあつて、藥を搗くといふことは

李白全集の註に「木華海賦。朱綠烟。傳玄擬天問。

月中何有。白兔搗藥」

月中の兔のことは

事文類聚に、張衡の靈憲を引きて「月者陰精之宗。積而成<sub>二</sub>獸象<sub>一</sub>。兎陰之類。其數耦」

月のことを月兎ともいふ。

姮娥。コウガ。月の異名。羿の妻、姮娥が不死の薬を竊みて月中に奔つたといふ故事による。

後漢書の註に「羿燃<sub>二</sub>無死之藥於西王母<sub>一</sub>。姮娥竊之以奔月」

李白全集の註に「獨異志。羿燒<sub>二</sub>仙藥<sub>一</sub>。藥成。其妻姮娥窃而食<sub>レ</sub>之。遂奔入<sub>二</sub>月中<sub>一</sub>」

右二句は月に關する傳説を思ひ出したのである。

【今人不見古時月、今月曾經照古人】

今の人は見ず古時の月。今の月はかつて古人を照す。

この二句は月光を機縁に過去を追想したのである。

【古人今人如流水、共看明月皆如此】

古人今人、流水の如し。共に明月を看ることかくの如し。

古人といひ今人といひ、過去の人といひ現實の人といつ

ても、それをもう一步高いところから見ると、共に流水

の如く流轉極りないものである。古人といへども當時に

あつて月を眺めたときは、今、吾々が月を見てゐるやうな感じを持つてゐたであらう。吾々といへどもその死後は後人によつて、古人として同情されるであらう。

かくの如く世の轉變と、月光の常住とを合せ考へて見ると、たまたまなく、感情がこみ上つてきて、現實感に執着したくなる。

【惟願當歌對酒時、月光長照金樽裏】

惟願はくは歌に當り、酒に對するとき、月光長く金樽裏を照さんことを。

世は流轉し、月光は常住す。流轉すればこそ常住が得られる。我が心は無限に生きようとし、又生きるけれども、

この肉體は亡ぶ。肉體のもつエネルギーは不滅であるけれども、その既存してゐる形態は失はれる。それが悲しい。

吾々は固定し乍ら常住を保つことはできない。停滯してゐるといふことは死んでゐるといふことである。吾々は

轉々として、變化して行かねばならぬ。生老病死せねばならぬ。それが悲しい。

せめては酒をのみ歌をうたふときは、月の光が酒樽を照してゐてくれればよい。

當歌對酒は曹操短歌行「對<sub>レ</sub>酒當<sub>レ</sub>歌。人生幾何」

【玉山頽る】世説の容止に「山公曰。稽叔夜之爲<sub>レ</sub>人也。巖々若<sub>レ</sub>孤松之獨立。其醉也傀俄若<sub>レ</sub>玉山之將<sub>レ</sub>頽」と見ゆ。

玉山は人品の高潔なるを云ふ。玉山頽れんとすとは、酔ひて倒れんとするを云ふ。

【大かたはの歌】今古集 雜上 在原業平「大かたは月を

もめでじこれぞこのつもれば人の老となるもの」

大概のことならば月も餘り賞翫すまい。この見る月影が

漸々つもるときは、あの人の老となる年月となるのぢや。

【月見るにぞなぐさむ】拾遺 八 雜上 大江爲基

「詠むるに物思ふことの慰むは月はうき世のほかよりや

ゆく」

詠むるに、月を眺めることによつて。

物思ふ、モノオモふ。萬葉ではモノモフと詠む。多く

戀に惱む心をいふ。こゝではその心は一般人生に推

し及ぼしていふ。

ほかよりやゆく、ゆくは連體形結び、月は浮き世の外

の——天空に住つてゐるから、それで月を眺めてゐると物思ひの心が慰められるのであらうか。

【べかめり】「べくあるめり」の略なり。

【一丁字知らぬ】一文字も知らぬこと。

書言故事に「唐張弘靖曰。天上無事。爾輩挽<sub>二</sub>兩石弓<sub>一</sub>。不知<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>一丁字<sub>一</sub>」

康熙字典に之を引き且つ曰く「按<sub>二</sub>續世説<sub>一</sub>、一丁作<sub>二</sub>二个<sub>一</sub>。因<sub>二</sub>篆文个與<sub>レ</sub>丁相似<sub>一</sub>。傳寫作<sub>レ</sub>之」

字典の説従ふべきに似たれども、今日は一丁字を熟語として用ふ。

【僉議】センギ。大勢集つて評議すること。

【舌を喰ひけり】笑ふこと甚だしきを形容す。

【世俗月を賞し云々】和漢共に月を賞すること擧ぐるに違あらず。

唐詩選王建の詩に「今夜月明人盡望。不<sub>レ</sub>思秋思在<sub>二</sub>誰家<sub>一</sub>」

東坡の後赤壁賦に「月白風清。如<sub>二</sub>此良夜<sub>一</sub>何」

古今 十四 戀四 讀人しらす。

「月夜よし夜よしと人に告遣らばこてふに似たり待たずしも非ず」

【寸尺を語るに等し】 月の直径や輿行を語るのと同じといふ意。作者が、月の寸尺を語るものを笑つてゐるところに、如何にも作者の頭がぎら／＼になつてゐることがわかる。寸尺を語つたものは果して、全然の無智から出たものであらうか。酔餘の座興にいつたものである。酒を飲んでゐない、しかも正直にして、やゝ知識をもつてゐる作者の幼時にあつてはをかしかつたであらう。それを老年に思ひ出すのはなほ又をかしいであらう。しかし、それを無智文盲としてあざけるならば作者の方がどうかしてゐる。

【騷人墨客】 正字通に「屈原作離騷。言遇憂也。今謂詩人為騷人」とあり。墨客は文筆を玩ぶ人を云ふ。

【金玉を雕り】 詩文を作るに、美辭麗語をあつめて修飾するを云ふ。揚子法言に「雕蟲篆刻之技」など見ゆ。同じ意なり。

金玉ならば「雕り」といひ、錦繡ならば「裁す」といふ。

【景氣】 けしき、氣分の意。

【月に深き感あり】 李白の詩に見るが如く、月光から懐古の情を催し、流轉の相を観じ、永遠無窮の感に徹するをいふ。これは本質に貫かうとする心である。物くひ、歌ひの、しるを樂むは、物の利用に止る心であつて、學者と商人との比をなす。

【古人の形見】 古人を慕ふのは單なる歴史的な人物でなく、古人の歩んだ、普遍的な人間性、永遠な生命への渴望である。

【月はものをいはねど語るやうに覺え】 月光から觸發する感じをいつたものである。月光と主觀性とが盛に交錯してゐるのである。

【忘れては云々】 伊勢物語に「わすれては夢かと思ふおもひきや雪ふみわけて君を見んとは」

【李白】 字は太白、青蓮と號す。唐の隴西成紀の人、或は曰く、山東の人、或は曰く、蜀の人と。母長庚星を夢みて生む。因りて名づく。少くして逸才あり志氣豪放飄然として超世の志あり。天寶の初長安に至り、賀知章を見

る。知章、其の文を見て歎じて曰く、子は、謫仙人なりと。玄宗見て食を賜ひ、親ら爲めに羹を調ず。詔あり翰林に供奉せしむ。白猶酒徒と市に飲む。帝白を官にせん

とす。楊貴妃之を阻止す。白自ら親近のために容れられざるを知り、山に還らんことを求む。帝金を賜ひて放還す。寶應元年卒す。年六十二。李太白集三十卷あり。玄宗の時詔して、李白の歌詩・斐旻の劍舞・張旭の草書を三絶と爲すといふ。

【詩の豪宕超越】 李白の詩は、その人物の超邁豪宕なるが如く、豪放を以てすぐれてゐる。

嚴羽の滄浪詩話に「子美不能爲太白飄逸。太白不能爲子美之沈鬱」

【杜甫】 字は子美、少陵と號す。唐の襄陽の人、河南に徙る。父閑奉天の令となり、遂に杜陵に居る。甫、進士に擧げられて第せず、因りて長安に遊び玄宗の朝に賦を奏す。帝之を奇とし、集賢院に待詔せしむ。肅宗立ちて右拾遺に拜す。後に官を棄て秦州に客たり。薪を採り橡栗を拾ひ自ら給す。大曆五年來陽に客死す。年五十九。性

放曠にして好んで天下の大事を論ず。忠君愛國の情詩歌にあらはる。著す所、杜工部集二十卷、世に詩史と號す。

元稹曰ふ「詩人ありて以來未だ子美の如き者あらじ」と。後代を待つ心は見えず。これは一應尤なことであるが、詩心の集中から云へば、過去未來に分散すべきものではない。

【楚辭】 楚の屈原の作つた文をあつめた書で、屈原の弟子宋玉・景差などの文も并せ載せてある。漢の劉向の編するところ。後漢の王逸、己の作の九思と班固の二敘とを加へて十七卷とし、章句を作る。これ本書の最古の注。宋の朱熹、集註八卷を作り、平の作二十五編を離騷とし、宋玉以下十六編を續離騷とした。

【往者余不及】 この文は楚辭遠遊篇に「悲時俗之迫隘兮。願輕舉能遠遊。質菲薄而無因兮。焉託乘而上浮。遭沈濁而汚穢兮。獨鬱結其誰語。夜耿耿而不寐兮。魂營々而至曙。惟天地之無窮兮。哀人生之長勤。往者余弗及兮。來者吾不聞」と見ゆ。



【屈子】 屈原のこと、名は平、楚の懷王に仕へ左徒たり。博聞強記、治亂に明らかに、辭令を善くし、王甚だ寵任す。上官大夫、その能を嫉みて讒す。王怒りて屈原を疎んず。屈原、深く王聽の聰ならず、讒邪の公明を蔽ふを疾み方正の容れられざるを悲み、憂愁して離騷を作る。後に懷王、秦に欺かれて國破られ、王亦秦に死し、頃襄王繼いて立つ。屈原放流せらるると雖楚國を懷ひ、懷王の遂に悟らざりしを嘆き、令尹子蘭の王に勸めて秦に入らしめしを疾む。子蘭、之を聞き大いに怒り、卒に上官大夫をして屈原を頃襄王に諂らしむ。王怒りて之を遷す。屈原江濱に至り、被髮行吟し、漁夫と相語り、懷沙の賦を作り、遂に自ら汨羅に投じて死す。

【今は末の世の昔】 漢の京房の語に「臣恐後之見今。猶今之視前」と。

【あつらへ告げらる】 古今集 春「吹く風にあつらへつぐものならばこの一本はよきよといはまし」と見ゆ。これによりて書けり。注文して告げ得る意。

【月みればの歌】 大意は、月は悠遠なる時間を通じて照ら

すものなるによりて、月を見れば千歳無窮の感起りわが無からん後の世の事までも忍ばれて、又見ぬ世のむかしこの事、いとゆかしく思はるとなり。「忍ぶ」は慕はしく思はること。「ゆかしは」心行きて知りたく思ふ意。

節意

第一節「……玉山頽るゝばかりに見えにけり。」まで。月を賞するありさま。はじめはその序引としてその座のありさま時節等をのべ、それから、李白の詩を引く。

第二節 終りまで。

月を詠じた和歌。

過去の思ひ出——通俗的な月観。

作者の月に對する見方。こゝまできて、さきに引用しておいた李白の詩を批評する。

李白と屈原との比較。

作者の月に對する見方。(重ねてのべる)——昔を知る事。

一七 山崎闇齋

平 泉 澄

出所

闇齋先生と日本精神 平泉 澄編  
昭和七年十月、闇齋先生二百五十年祭に際し、記念の催しとして編纂刊行せられた本である。

目次

- 一 闇齋先生と日本精神 文學博士 平泉 澄
  - 二 崎門尊王論の發達 内田 周平
  - 三 崎門學者と南朝正統論 内田 周平
  - 四 垂加神道の源流と其の教義 文學博士 山本 信哉
- 印度思想・支那思想の長き遍歴の後に眞に己に歸り、日本精神に覺醒したる哲人山崎闇齋先生、其の學問の要は知行合へ、實踐躬行にあり、其の思想の極は尊王愛國、日本精神の發揮にある。而してその精神は俊秀有爲の門流に依つて脈々として後世に傳はり、神道・儒道・史學の各方面の活動に、幾多勤王愛國の志士を輩出せしめ、よく天下の風雲を喚起して王政復古の氣運を醸成し、遂

に明治維新の大業を翼賛した。一人の學者の思想にして斯く迄天下後世に影響し、皇運を扶翼し國家を護持したものの古今稀に見る所である。闇齋先生歿して二百五十年、その傳統は漸く忘却せられんとして居、而も今や我が國は未曾有の非常時に際會し、本書の刊行せられ、山崎闇齋先生の所論の再検討せられる事は極めて時宜に適した企である。

作意

國粹を説く人は多いが眞に日本を知つて説く人は極めて寡い。闇齋はその意味に於て最も勝れた人であり、而も比較的一般に知られてゐない人物である。國難相踵いて來るの秋、闇齋精神を青年に理解せしめる事は最も緊喫事である。

解釋

【藤原惺窩】 フヂハラ セイカ。徳川初期の儒者、名は肅。名は敏夫。別號北内山人、柴立子、廣半窩。播磨三木の

人。父は參議爲純。初め佛教を學び、詩學を以て五山僧侶を凌ぎ、更に朱子學を研究した。徳川家康に知られ、林羅山・菅玄洞・松永尺五其他多くの門人を教導した。元和五年(二二七九)卒、年五十九、明治二十六年贈正四位。文章達録・假名性理・千代もと草・惺窩文集・惺窩和歌集等の著がある。

【山崎闇齋】 ヤマザキ アンサイ。名は嘉、字は敬義、通稱嘉右衛門、又は垂加と號した。徳川時代の儒者として知らる。泉州の人で京師に移り住んだが、後叡山に入つて僧となり、更に土佐吸江に移り佛學を修めた。土佐には野中兼山・小倉三省・谷時中等あり、闇齋に就いて程朱の學を聴き、遂に髮を蓄へて儒に歸し、土佐侯に逐はれて京都に歸つた。時に年二十五。家塾を開いて諸生に教へ、名漸く高く、會津侯保科正之に聘せられて好遇された。丈神道の教義を交へて、垂加流の神道を唱へた。彼は度會(ワタラヒ)延佳、吉川惟足(コレタル)等の學説から多くの影響を受けてゐる。神道五部書中の「神垂以祈禱爲先、冥加以正直爲本」の語から垂加の二字を

採つて自ら號した。「垂加草」・「神代卷風葉集」・「中臣被風水草」はその經典中の代表的なものである。學説は長く水戸學の中に尾を曳いて尊王の大義心を後世に鼓吹した。天和二年(三三四二)卒、年六十五、贈正四位。

【林羅山】 ハヤシ ラザン。徳川時代の儒官。儒家林家の祖、名は信勝。字は字信、通稱又三郎。羅山はその號。薙髮して道春といつた。京都の人。藤原惺窩の門に入つて儒學を修め、家康以後家綱に至る四代の將軍に仕へ、律令・祭祀の典儀及教育の方針を定め、子孖相繼いで幕府二百餘年間の文教を掌つた。民部卿法師に叙せられた。明暦三年(三三二七)卒。年七十五、大正四年贈正四位。

【谷時中】 タニ ジチュウ。徳川時代の儒者。名は素有、通稱文學。後、三郎右衛門といつた。土佐の人。初め佛門に入り慈沖と云つたが、程朱學を研究し、還俗して大功があつた。山崎闇齋、野中兼山等はその門から出た。慶安二年(三三〇九)卒、年五十二、大正四年贈從四位。【契沖阿闍梨】 ケイチ ユウジャリ。徳川初期の國學者。

俗姓下川氏。字は空心。攝津尼ヶ崎藩士下川元全(モトタカ)の子、十三歳出家。國學を好み、和歌を善くした。老母の死後高洩に圓珠庵を結び、元祿十四年(二三六一)寂、年六十二。著書の中最も學界に寄與したのは萬葉代匠記で、宣長の古事記傳と並んで古典著述の最大著述とされてゐる。其舊庵圓珠庵及墓は指定「史蹟」阿闍梨は梵語 Arhatya の音譯で、和尚につく僧の稱。手本にある程の人の意。阿闍梨耶の略。

【中朝事實】 二卷。山鹿素行の著。皇統の實事を記述して我國體の高邦に冠絶する所以を明らかにしたるもの。

【山鹿素行】 ヤマガ ソコウ。徳川時代の儒者且兵學者。山鹿流軍學の祖。名は高祐、字は字敬。別號因山、通稱甚五右衛門、會津の人、儒學を林羅山に、兵學を北條氏長に學び、承應元年赤穂侯に聘せられ、萬治三年辭し、程朱學を斥けて幕府の忌諱に觸れ、赤穂に十年間配流され、後江戸でまら兵學を講じた。貞享二年(二三四五)卒、年六十四、明治四十年贈正四位。武教要録・山鹿語類・中朝事實・四書句讀・治教餘録・武家事記・治平要

録神道書等の著がある。

【朱子學】 朱子、名は熹、字は元晦、後字を仲晦と改めた。號は晦庵、支那宋代儒學の大家。周・張二程の説を集大成し、宇宙の本體を太極とし、これを以て理氣二元の綜合を行ひ、此二元を以て人性を解し、其修養論に於ては居敬を主とし、窮理を以て其智を進むべきを主張した。應元六年(一八六〇)歿、諡を文といひ、孔廟に從祀された、尊んで朱子といふ、宋學の大成者で、其學を朱子學といふ。徳川幕府はこの學を天下に勸めた。

【入門の誓書三箇條】 關白一條兼輝は正親町中納言公通の弟子であるが、靈元天皇の貞享二年九月四日に神文を公通に納めて垂加神道の許可を得てゐる。その神文は次の如くである。

神文

- 一、神道相傳事、誠恩義之至大悅事、
- 一、不可以示非其人、堅守此訓、於無許可者、猥開口傳人間敷事、
- 一、異國之道不可令習合附會事、

右三ヶ條之旨於相背者、

伊勢八幡愛宕白山牛頭天皇、殊伊豆箱根兩所權現、惣而日本國中大小神祇之御罰可相蒙二者也。

【百家の傳・諸社の密】 多くの學者の言傳へられてゐる主張、各流派の據つて立つ衾密なる處。

【澁川春海】 シブカハ シュンカイ。徳川時代の曆學者。

後保井算哲と改む。通稱は助左衛門。春海は字。闇齋に學び、天文・曆數に通じ、貞享曆を作つて幕府の天文官となつた。闇碁をよくした。正徳五年(二三七五)卒、年七十七、明治四十年贈從四位。

【谷秦山】 タニ シンザン。徳川時代の神道家、土佐の人。享保三年(二三七八)卒、年五十六、贈正五位。著書に秦山集がある。

【吉見幸和】 徳川時代の神道家、尾張の人。寶曆十一年歿。年八十九。闇齋の學問の糞隘を難じた事は彼の著「神道五部書辨」に見えてゐる。

【谷川士清】 タニガハ コトスガ。徳川時代の國學者。名は昇。號は淡齋、士清はその字。伊勢の人。神道を玉木

葦齋に、和歌を有栖川宮熾仁親王に受け、國史・國語にも通じた。安永五年(二四三六)歿。年七十(或は六十八とも云ふ)贈從四位。幸和を辯駁したのはその著「五部書辨批」に於てである。

【荻生徂徠】 オギウソライ。徳川時期の有名な學者。姓は物部、自ら修して物氏と云つた。名は雙松、字は茂卿、通稱總右衛門。徂徠は其號。江戸の人。柳澤吉保に仕へ頗る恩遇を受けた。初め程朱の學を奉じたが、伊藤仁齋が京に古學を唱へるに及び、又古文辭學を唱へて宋儒性理の學を非り、古學を斥け、經術・文章相稱ふを以て學者の本質とした。享保十三年(二三三八)歿、年六十三。辨道・辨名・論語微・大學解・中庸解・鈴録・譯文笠蹄等の者がある。

【東夷】 支那は四隣を東夷西戎北狄南蠻と蔑稱し、自らを中華と誇つた。それを徂徠は自ら蔑んで東夷と甘んじ稱したのである。

【太宰春臺】 ダザイ シュンタイ。徳川時代の徂徠派の學者。名は純、字は佳夫。信州飯田の人、江戸に出て荻生

徂徠に古學を學び、徂徠歿後經學を以て徂徠の志を繼ぎ、王侯・貴顯にも下らず、剛毅狷介、道を樂み貧に安んじ、獨立特行一生を終つた。延享四年(二四〇七)歿。年六十八。討究論文は春臺先生紫芝園後稿に收められてゐる。

【木下順庵】 キノシタ ジュンアン。徳川時代の儒者、名は貞幹。字は直夫、通稱は平之元、別に錦里、敏慎齋、齋薇洞と號した。京師の人、松永尺五の門に學び、その學博通不偏を主とした。東山に家塾を開き、名づけて雉塾と云つた。新井白石・室鳩巢・雨森芳洲等其門に出た。後加賀侯に仕へ、天和二年幕府の學職に補した。元祿十一年歿。年七十八。私に諡して恭靖先生といふ。明治四十二年贈正四位。

【淺見綱齋】 アサミケイサイ。徳川時代の儒者。名は安正。綱齋は其號。字は重次郎。近江國高島の人。京都に出て醫を業としたが、後山崎闇齋に心服し、醫業を止め刻苦勉勵遂に儒者として一家をなした。正徳元年(二三七一)卒、年六十。贈從四位。靖獻遺言・六經編考・父

母存説考・伊川先生四箴・大學物説・綱齋文集等の著がある。

【靖獻遺言】 綱齋の著書。二卷。支那楚の屈原以下明の方孝孺に至るまで忠孝・節義の士八人の文を撰び、其略傳を擧げ、又歴代忠臣の言行を附したるもの。

【大名分】 ダイメイブン。分限、身分、即ち名に伴ふ人倫の分限を指す。

【三綱五常】 サンカウゴジャウ。三綱は君臣・父子・夫婦の道、綱は大綱の義。白虎通に「君爲臣之綱、父爲子之綱、夫爲婦之綱。五常は人の常に備ふべき五つの大事、即ち仁・義・禮・智・信、漢書に仁・義・禮・智・信五常之道、王者所當修飾也。

節意

第一節(依據となつた迄)。思想的放浪の後に日本的なるものに目覺めるのは偉大なる思想家の常である。山鹿素行亦然り彼こそ近世武士道の依據する所であつた。

第二節(實にこれによる迄)。彼は學は博覽強記を求めず、常に之を批判するにある。

第三節（見えてゐる迄）。彼は當時俗儒の支那を盲拜するを戒め、中朝事實を著して、我國の尊崇すべきを訓へた。

第四節（終迄）。靖献遺言に見ゆる如く、崎門の人々の、儒と呼ばれて儒に捉はれぬ毅然たる態度は闇齋が日本人としての自覺の上に門下を指導した爲である。

**挿齋解説**

山崎闇齋

先哲像傳に據る

山産業行

人傑大觀に據る

一五 吉田松陰

川村理助

**作者**

川村理助 カハムラ リスケ。

慶應三年七月二十四日、茨城縣稻敷郡岡田村に生まれた。明治二十三年四月、東京高等師範學校博物學科卒業。少壯既に師範學校長として令名あり。歴任して東京高等師範學校教授となつたが後、出版業を營み最近精進道を鼓吹して全國を行脚した。現に調布高等女學校長。雜誌「精進」を發行。

著書には「自由人となるまで」「體驗生活」「平和の心境」「永遠の生命」等がある。

**出所**

體驗生活。川村理助著。大正十二年五月二十日。培風館發行。著者の宇宙觀、人生觀を吐露したものである。その内容については「はしがき」の中に左の如くある。

「本書第一篇は代表的倫理學說の批判でありまして、第二篇の序論であります。第二篇は體驗の事實が宇宙實在であること、並

に體驗界の性質を説き終りに宇宙人生の真相を述べたもので、私の哲學であります。第三篇は私の藝術觀、宗教觀、教育觀であります。共に體驗が根柢であることを述べたものであります。第四篇は體驗進入の方法を、私の經驗と各宗教の方便とから歸納して、私の新宗教を提唱したものであります。第五篇は以上の論斷より現代各方面の人々に警告を與へたもので、いはば一種の應用論であります。』

さて本課は本書、第三篇の最終にある「大教育家の陶冶力よ」（一七二—一八一）をそのまま採用せられたものである。採用に當つて何等加減はしてゐない。

**作意**

吉田松陰の教育精神を論述して、著者の教育觀を述べたものである。

一言にしていへば吉田松陰の教育主義は、體驗主義であつたのである。それを力説するため、多くの書簡文章を引用して、それに感想をつけ加へたのである。

**解釋**

【吉田松陰】 ヨシダシヨウイン。

勤王家。教育家。名は矩方（ノリカタ）。字は義卿。通稱は寅次郎。二十一回猛士の號がある。長門國萩の藩士。杉常道の子で吉田賢良に養はれ、佐久間象山に師事した。慷慨家で氣節があつた。心を宇内の形勢に注ぎ、海外に歴遊して大いに爲すあらんとし、安政元年三月二十七日、伊豆國下田に赴き、米艦に投じたところが聽されず。事幕府に聞え獄に繋がれたが幾もなくして許されて、萩にかへつた。村塾を開いて青年士弟の教育に努力した。人よんで松下村塾といふ。後、梅田雲濱の事に坐して、後、幕府の忌避に觸れ、安政六年十月二十七日、武蔵野の露と消えた。年二十九。尙、詳しくは卷三、二五、妹にさとすを見よ。

【陶冶力】 タウヤリヨク。陶冶とは、もと陶器を作ること。鑄物を鑄ることであるが、こゝでは養成、育成、教化などといふ意。Bildung と云ふ獨逸語を譯して陶冶といふ。獨逸語のビルデュングといふ言葉ももと一定の型 Bild になぞらへて事物を形成するといふことで、外部的に形

を與ふる場合にばかり用ひられてゐたが、メーゼル、ゲーテ等以後始めて内部的に精神生活を形成する意味に轉用せられた。教育上では之を内部的に解釋し、人間の天賦の性質を完全な姿に發達せしめることをいふ。

【伊藤博文】 イトウヒロブミ。舊山口藩士。幼名は利助。後俊輔と改め、春畝と號した。夙に歐洲に赴き、明治元年參與となつた。力を憲法の制定に盡くした。しばく首相の任に就き、従一位、大勳位、公爵になつた。日露戰爭後韓國の統監となつた。明治四十二年十月、滿洲視察の途上、ハルビン驛で韓人に狙撃せられて薨じた。年六十九。

伊藤公の詩。

道徳文章叙イソノ彝倫。

精忠大節感セシム明神。

如今廊廟棟梁器。

多是松門受教人。

【廊廟】 ラウベウ。朝廷の事をいふ。

【棟梁器】 トウリヤウノキ。重任に堪ふる才器のある人。

【松門】 松下村塾をさす。

【宏謨】 クワウボ。大きなはかりごと。

【匹儔】 ヒツチウ。ともがら。たぐひ。

【秘鍵】 ヒケン。秘密のかぎ。

【彼が塾生に示した文】 此はもと漢文である。川村氏の書既に假名交りに直したのである。

村塾寛略禮法。擺落規則。非以學禽獸夷狄也。非以慕老莊竹林也。特以今世禮法末造。流爲三虛僞刻薄。欲誠朴忠實以矯揉之已。新塾之初設。諸生皆率此道。以相交。疾病艱難相扶持。力役事故相勞役。如手足。然。如骨肉。然。増塾之役。不三多煩工匠。乃能有成。職是之由。

【擺落】 ハイラク。擺はひらくといふ意。おしおとす。

【夷狄】 イテキ。東夷・南蠻・西戎・北狄といふ言葉がある。禮記に「東方曰夷、南方曰蠻、西方曰狄、北方曰狄」とある。

【老莊】 ラウソウ。老子と莊子と。或は其の流れを汲む老莊學の事。宇宙の根元を虚無におき、道徳の標準を無爲におく。従つて、禮法などをやかましくいはない。禮法を重んずる儒教からは異端の學と目せられる所以である。

【竹林】 有名な竹林の七賢のこと。老莊の徒七人が晉の世に放逸世を逃れて、竹林の遊びをしたといふ。嵇康・阮籍・山濤・向秀・劉伶・阮咸・王戎の七人。

【禮法末造】 「末造」とは末の世のこと。

【刻薄】 コクハク。殘忍にして薄情なること。

【矯揉】 ケウジウ。ためあたらためること。

【久坂義助】 クサカヨシスケ。通武。字は實甫。通稱は義助。玄瑞と稱す。萩侯の醫官。松陰の門人で、妹婿。元治元年六月、君側を清め、聖旨を奉體せんとて、兵を率ゐて京師に入り、幕府の兵に拒まれ、利あらずして自殺した。年二十六。

【久坂義助に與へた書】 この書も原形とやゝ異つてゐる。川村氏の書物に既にさうなつてゐるのである。

病肺の事最早昔話に御座候。必御案じ被下間敷候此節大暑中候得共甚壯なり。隔日左傳八家會讀。勿論塾中常居七ツ過會讀終る。夫より品又は米春、與在塾生同之。米春大得其妙。大抵兩三人。同上り會讀しながら春之。史記など二十四葉讀む間に米精ケ畢。亦一快なり。

口羽に話候得ば評して、オカシイ事許りする男と云つた。  
【左傳】 サデン。春秋左氏傳。春秋の事實を敷衍したもので、全三十卷。支那周代の左丘明の著述。公羊傳、穀梁傳と併せて春秋三傳といふ。

【八家】 唐宋八大家文讀本の略。清の沈德潛が、唐宋八大家の佳作を輯めたもので、全三十卷ある。唐宋八家文ともいふ。

【會讀】 クワイドク。數人寄り集つて、書籍を讀みかはそのこと。當時に於ける一つの勉強法である。

宣長の玉勝間八卷に「こうさく、くわいどく、聞書」といふ興味ある文がある。その中に、

「……會讀といふことをぞすなる、こはこうさくとはやうかはりて、おの／＼みづからかむがへて、思ひえたるさまをいひこゝろみ、心得がたきふしをば、とひきゝ、かへさひもして、かたみにあげつらひ、さだむるわざなれば……」

【史記】 シキ。黃帝から漢の武帝までの事を記したる紀傳體の支那史。本紀十二卷、年表十卷、書八卷、世家三十

卷、列傳七十卷、合せて一百三十卷。漢の司馬遷の著。

【今日の教育者に見せたら……】 近頃我が國にも獨逸風の作業教育、勞作教育といふことが喧傳せられるやうになつた。その方法等の點に就いては種々異論もあらうが、松下村塾の教育精神は全くこの作業主義であつたといふ事が出来ようと思ふ。川村氏は、明治の正統教育の狀態から、かういふ事をいはれたのであるが、今日の作業教育からみると却て進んで居るといふべきであらう。獨逸に於いてケルシェンスタイナーが始めて作業學校「Arbeits schule」といふ言葉を使つたのは一九〇八年である。吉田松陰の教育の精神は實にベスタロッチーと共に古いものである。

【危急存亡の秋】 キキフソソンパウのトキ。亡びるか残るかといふ程に極めて危いとまのこと。

【血性】 多血質のこと。氣質の一つ。

【孟子】 モウシ。孟子の自著かどうか諸説あるがとにかく、孟子が孔子の道を祖述したもの。七篇ある。梁惠王章句上、下。公孫丑上、下。滕文公上、下。離婁上、下、萬

章上、下。告子上、下。盡心上、下。

【閭里】 リヨリ。村里。

【戈を枕にし】 ホコ。

【槩を横たふ】 サク(或はホコ)ほこを小脇にはさむこと。

【除夕】 チョセキ。おほみそかの夜。

【三元】 三元にはいろ／＼の意味があるが、こゝでは頭註のやうに、元旦の異稱とするのがよい。

【契濶】 ケイクワツ。久しぶり。無沙汰。

【野山の獄中から妹に送つた書】 卷三、二五「妹にさとす」を見よ。

【私のいはゆる體驗】 體驗生活、第二篇に「體驗といふのは」といふのがある。

母親がその子を愛育する有様を見ますと、子供が悲んだといつては共に悲み、子供が喜んだといつては共に喜び、丁度子供の心と己れの心とが共通して居るかの如く、一切の勞苦を忘れて行動して居ます。又忠臣義士の行動を見ますと、己れ一身の利害得失などは念頭に置かず、最愛の妻子を捨て、終には生命までも犠牲に供して、君國の爲めに盡瘁して居ます。(つまり君國と己れとが共通して居るのであります。これに似たことは、我れ

【教育界の基督】 徳富蘇峰の吉田松陰の中の「松下村塾」に左の如き文がある。

彼は變則なるベスタロジナリ。彼は實物教育の大主義を踐行せり。唯だベスタロジに異るは、一は天地萬有を以て、實物教育の資となし、他は活世界の時事を以て、實物教育の資と爲したるのみ。其の嬰兒の如き赤心を以て、其の子弟を愛し、自ら彼等の仲間となり、彼等の中に住し、彼等の心の中に住するに到りては、二者豈に軒輊あらんや。否な變則なる教育家は、教育の本尊よりも、恐らくは有效なる教育家たりしならむ。

節意

第一節。「……意見を述べて見たいと思ひます。」まで。

序節。松下村塾の偉大な事業についての略述。吉田松陰の教育観についての大體の觀察。

第二節。「……融合一致して居たのであります。」まで。

塾生に示した文と久坂義助に與へた手紙によつて、松陰の教育の大體を示す。その特色は、師弟が一致融合してゐたこと。

第三節。「大晦日も元日もなかつたのであります。」まで。天下國家と一致融合してゐたこと。

岡田耕作に示す文を引いて、彼の教育の特色を述べる  
第四節。「……焼き盡さずには置かないのであります。」まで。

品川彌二郎に與へた手紙。これも松陰の教育の實際。  
第五節。終りまで。

松陰の手紙の文句によつて、「一心不乱」といふ言葉を出し、體驗と教育といふ事。結論である。

参考

松下村塾の事に就いては、徳富蘇峰著「吉田松陰」を参照の事。

一九 光は日本より

〔高須芳次郎〕

作者

高須芳次郎 タカス ヨシジラウ。  
號を梅溪といふ。明治十三年四月、大阪船場に生れた。早稲田大學英文科を卒業して新聞記者となつた。雜文・評論・史論等に見るべきものがある。

著書に、平家の人々・近松の人々・西鶴の人々・明治代表人物・佛蘭西革命夜話・國民の日本史・近代文藝史論・近世日本文學十二講・現代日本文學十二講等がある。

出所

光は日本より の中から、高須芳次郎の筆になる「祖國愛の意義」と題する一文を採録した。

「光は日本より」は現在の國內的國際的的重大時機に際して日本は如何にすべきか、日本とはどんな國か、日本の思想上に於ける長所、日本文化に於ける優越點は何處にあるか、日本が今後世界文明上に寄與すべきはどの方面にあるか等を正確に考へねばならぬとして、學者政治家・

宗教家・文藝家・評論家等のそれ／＼専門の立場より日本を見、日本を検討した論文一篇づつを収録して一冊を成したものである。新東邦協會編。

昭和四年、東京、新潮社發行。

作意

現時の日本は種々の方面に於て重大時期に臨んでゐる。この時に於て國民に最も必要なことは、日本國民としての自覺を高め、日本及日本文化に對する認識を深くすることである。政治・學術・工藝・軍事等の如く歐米諸國の後塵を拜してゐたものが、いつか、自主的になり、自らそれら事件の中心になるやうに進まねばならぬ時である。即ち祖國を正確に再認識することにあるのである。本課の文はその意味に於て大いに參考となると思ふ。

解釋

【調和】 テウワ。ハーモニー。Harmony. 美的統一を、その多様の方から及びその性質の方から見た場合である

感覺内容相互の性質の間に一定の法則によつて、主觀的に一種の統一關係が成立し、快適の感を生ずる場合をいふ。色彩の調和、又は音楽上の和聲などはこれである。

【宇宙觀】 ウチウクワン。宇宙の原語 *Cosmos* は、もと秩序或は裝飾の義である。絶對的無秩序、無法則の状態を意味するところの「渾沌」(Chaos)に對して、秩序・法則を含む組織體として考へられた一切存在の總體を意味する。

【森羅萬象】 シンラバンシヤウ。天地間にありとあらゆる萬物をいふ。

【天】 以下は岩波哲學辭典所載、文學博士宇野哲人の解説である。支那ではナチュラリズムの立場から、天地間の現象に對し、名山・大川・風雨・雷電などを凡て神と見て、而して最高の神を天としてゐる。天の信仰は古今に互つて政治・道徳・宗教の基礎である。天を只有形の青空と見る場合もあるが、あの高い青空の上に神が居ると見るが普通である。其の神を皇天とも上帝とも、或は皇天上帝ともいふ。使用に分つて言へば、體より言つて天

といひ、用より言つて帝といふ。即ち神それ自身を天と呼び、神が我々を主宰する點より帝と呼ぶ。さて天は萬物の根本で、人間も無論天の生んだものである。詩經の大雅、烝民篇に、天、烝民を生むといふのは、その意味である。天と萬民とは親子の關係である。故に父母が其子を愛撫教育するが如く、天も萬民を愛撫教養する。但し直接に萬民を愛撫教養する代りに、萬民の中で極めて優れて居る聰明睿智の人を見出して、之を萬民の君として師として天に代つて萬民を教養せしめる。そこで始めて君臣の關係が起る。即ち君主は天に依り任命されたるものである。故に君主は常に天命を畏みて、天意に従つて民を治めねばならぬ。これ即ち君主の職分である。天は又常に君主が其の任務を履行するや否やを監督し、人民の意嚮によりて、人民悦服すれば君は能く其の任務を盡くしたものの、人民不服なれば任務を盡くさぬものと認める。此の思想は頗る民主的と言はねばならぬ。さて君が能く其の任を盡くせば麟鳳龜龍其の他の瑞祥を降して之を賞し、若し其の任を怠り又は背く時は、先づ天災地變

を降して之を警しめ、尙ほ改悛しなければ、之を罰して其の位を廢し、之に代るべき聖賢に對して新に天命が下る。天命常無し只徳を是れ輔く。そこで革命が起る。支那に於ける易姓革命の風は全く天人の關係に對する此の思想に本づく。さて君臣の關係は、天意に依つて起るけれども、絶對的でなく、相對的である。君主が天意に従ひ天徳を奉じ居る限りに於て、人民は天に仕ふるが如く服従の義務があるけれども、絶對的に服従の義務があるのではない、若し君主暴虐にして、天意一旦之を離れたらば、もはや君主として之れに服従する義務は無い。君臣の關係は實に不確實のものと言はねばならぬ。それでは天下統治の上に於て困るので、夏殷以來、主權者は君臣の關係を絶對的ならしめんことを試みた。凡て人民は天の子なれども、君主のみを天子といひ、或は天を祭ることとを君主の特權とし、諸侯は領地内の山川を祭り、人民は祖先を祭るといふ社會的階級を設けて、君主の尊嚴を増大せんとしたことなどはその方法の一である。それと同時に夏殷以來世襲の風が起つたのも、君主の尊嚴を

大ならしむるに餘程效があつて、周代に至つては、詩經の小雅、北山篇に所謂普天の下、王土に非るは莫く、率土の濱王臣に非るは莫しといふ思想も普及するに至つたが、其後屢、易姓革命があつたので君臣の關係は遂に絶對的となることが出来なかつた。上述の如く天を宗教的に見るのは一般の傾向であるが其外天を形容的に用ひて食は臣の天なりといひ、或は妻は夫を所天といふが如き場合もあり、又上代に於ては荀子、漢代に於ては王充の如き、天を自然 *Nature* と見て、天災地變の如き、何等吾人の行爲と關係無しといふ機械觀を爲す人もあり、又漢魏に於て盛行した黄老思想及び六朝に於て盛行した佛教の影響によつて、宋以後に於ては天を哲學的に觀じて天は理なりといひ、宇宙の實在と見る思想が學者間一般の傾向となるに至つた。

【ゴット】 Gott. キリスト教に於ける神及び神と人との關係は次の如きものである。

一 超世界的なる神は父であつて、その世界に對する態度は全く愛の意志のみから出る。



- 二 神はその慈父の愛により人間に對して、完全なる神の子の状態にあつて神の超世界的にして永劫なる生命を獲得すべき天職を賦與する。
- 三 神は以上のやうな救済の目的のために全世界を創造してこれを攝理する。
- 四 神は人間に其の永劫的救済の天職を全からしめんがために直に能く其の人格と活動とに於て神の子の状態を實現せしめ、最高の意味に於て『神の子』と稱せられるイエスキリストをこの世に遣はした。
- 五 人間は神の賦與する救済状態に到達せんがために、イエスの福音の本旨に従ひ、改悔の眞心を以て完全なる神の子の幸福を享けんことを欲求せねばならぬ。而して如何なる境遇にあつても天父を絶對的に信任し、隣人を同胞として限りなく愛し、以てこの欲求が誠心誠意から出るものであることを證明せねばならぬ。
- 六 イエスがその弟子に示した救済の状態は固より現世に於ても既に實行される所であるが、その完全に現實せられるのは來世である。

- 【則天去私】 ソクテンキョシ。天地自然の理法に忠實に準據し、人間の私利私情をさしはさまないことをいふ。
- 【歸納】 キナフ。多くの個々の事實、現象から一般に通ずる法則・眞理を見出すこと。
- 【個人から國家に歸着する】 大學の教に『修身、齊家、治國平天下』とあるのもこれである。
- 【唯物】 ユイブツ。唯物論、又は唯物主義。唯物論は、物質的の一元論を立てて萬有の存在を説明しようとする學說で、精神的原理を以て唯一の原理とするところの唯心論と相對するものである。
- 唯物論は物質以外に實在を認めない、すべてのいはゆる精神作用を以て物質より生ずる作用の一種なりとし、物質的關係を以て萬有の存在と其の變化とを説明するものである。故に唯物論の發達は多く目的論を破壊した。宇宙の諸現象を物質的に觀察すれば、有形と無形たるを問はず、唯これを因果關係の連続と見る。有形の炭は火となつて無形の熱を發し、無形の熱は又有形の水を沸騰させる。かやうに一つの因は他の果を生み、果は又因とな

- つて更に他の果を生む。かゝる因果の連続の外に何等の力をも認めないので、また別にこれら事物の目的を認める必要がないのである。人生の目的を論じて神の光榮を現すにありとし、生物の存在を論じて人類に裨益するを目的とするといふが如きは唯物論の立場から見れば全然不必要の事である。故に唯物論は宗教的には無神論となり、倫理的には功利主義となる。
- 【唯心】 ユキシン。唯物と相對する思想である。精神的實在を以て萬有の原理とするところの學說。唯物論は精神現象をも物質原理の下に説明しようとし、唯心論は物質をも精神的實在の一種の表現と見るものである。
- 【圓融】 エンユウ。なだらかにして滞らないこと。
- 【一如】 イチニ。佛教の語。萬法の依る所の實體・實性にして永世不變不易の眞理たる眞如の理は、二ならず、異らざること。これより轉じて、一般的の語としては、物事が二ならず、完全に一致することに用ひる。
- 【體系】 タイケイ。統一的聯絡關係を保つところの多様な思想や事物の全體の組織をいふ。

- 【文獻】 ブンケン。「文」は書籍。「獻」は賢人の義。古の制度文物の徵證とすべきものをいふ。
- 【天真爛漫】 テンシンランマン。少しの修飾もなく、ありのままが言動にあらはれることをいふ。
- 蘇軾の詩に『天真爛漫是吾師』
- 【機微】 キビ。表面にあらはれぬ微妙な兆徴。隱微の間にきざす様子。
- 【非人情】 これは唯物的・物質尊重といふやうな意味で用ひたものである。夏目漱石が草枕に用ひた非人情とは大いに意味が異なる。
- 【上下交、利を征して國危し】  
孟子の開卷第一、梁惠王章句上の最初の一章に見える。  
孟子見梁惠王、王曰、『叟不遠千里而來。亦將有以利吾國乎。』  
孟子對曰、『王何必曰利。亦有仁義而已矣。王曰、『何以利吾國。』大夫曰、『何以利吾家。』士庶人曰、『何以利吾身。』上下交、征利、而國危矣。云々』
- 利を征すとは、利を求め取るをいふ。

【隨喜】ズキキ。もと佛教の語。喜んで歸依すること。心から有難く思ふこと。

【獨立不羈】ドクリツフキ。

【再評價】かつてそのものに或價値が認められてゐるが改めてその物をよく吟味して價値のつけ直しをすること。

【新清算】あたらしく勘定の仕上げをすること。

【節意】

第一段一つの根を据えてゐる迄。東洋殊に日本文化の基調は「調和」を尊ぶ事に在るとして、西洋の分析的基調と比較してその特色を闡明した。

第二段根ざしてゐるのである迄。日本文化を整理し體系づける原理となる日本哲學に如何なる特色があるかの點に論及して、日本哲學に於ける特色は、(1)統化と實行であり、(2)自然の人情を尊重する事であるとした。

第三段終り迄。日本人は自國と外國との特質の差異を慎重に吟味し、日本固有の文化を無視せぬやうにせねばなら

ぬ。日本の努力によつて、東洋人種の命脈が保たれるのである。要するに現時は多年に亙る歐化主義の弊害を一掃し日本の自覺の下に新文明を創造すべきを切言した。

【参考】

教授上の注意

本課は教材の分量としては相當長いものであるが、その内容は比較的單純且つ明瞭である。故に通讀的に取扱つても大體の事は諒解し得るのである。その用ひである語句には間、嚴密正確な意味で使用するの用意を缺いて、通俗的に軽い意味で用ひてゐるやうなものがあるから、それらの諸語句を嚴密にしらべてくれればやゝ不滿を覺えるやうなこともあらうが、どこまでも、全體の主張に重きを置いて讀むといふ態度で行くべきだと思ふ。とにかく内容を十分に讀みとり、混亂時代の、さうして未だに西洋妄拜の風の脱けきらない、現代の、そして現代若人の頭に一脈反省の正氣を流入せしめたい。

師範國文第一部用教授備考 卷七

再版 師範國文第一部用教授備考卷七

昭和十三年十二月十五日印刷  
昭和十三年十二月十八日發行

編者

光風館編輯所

發行者

上原才一郎

發行所

光風館書店



東京市神田區神保町一丁目五番地  
東京市豊島區高田南町一丁目三百五十七番地  
正木社印刷所

印刷所

正木家

吉田彌平編  
石井庄司補訂

昭和十三年三月四日  
文部省檢定済

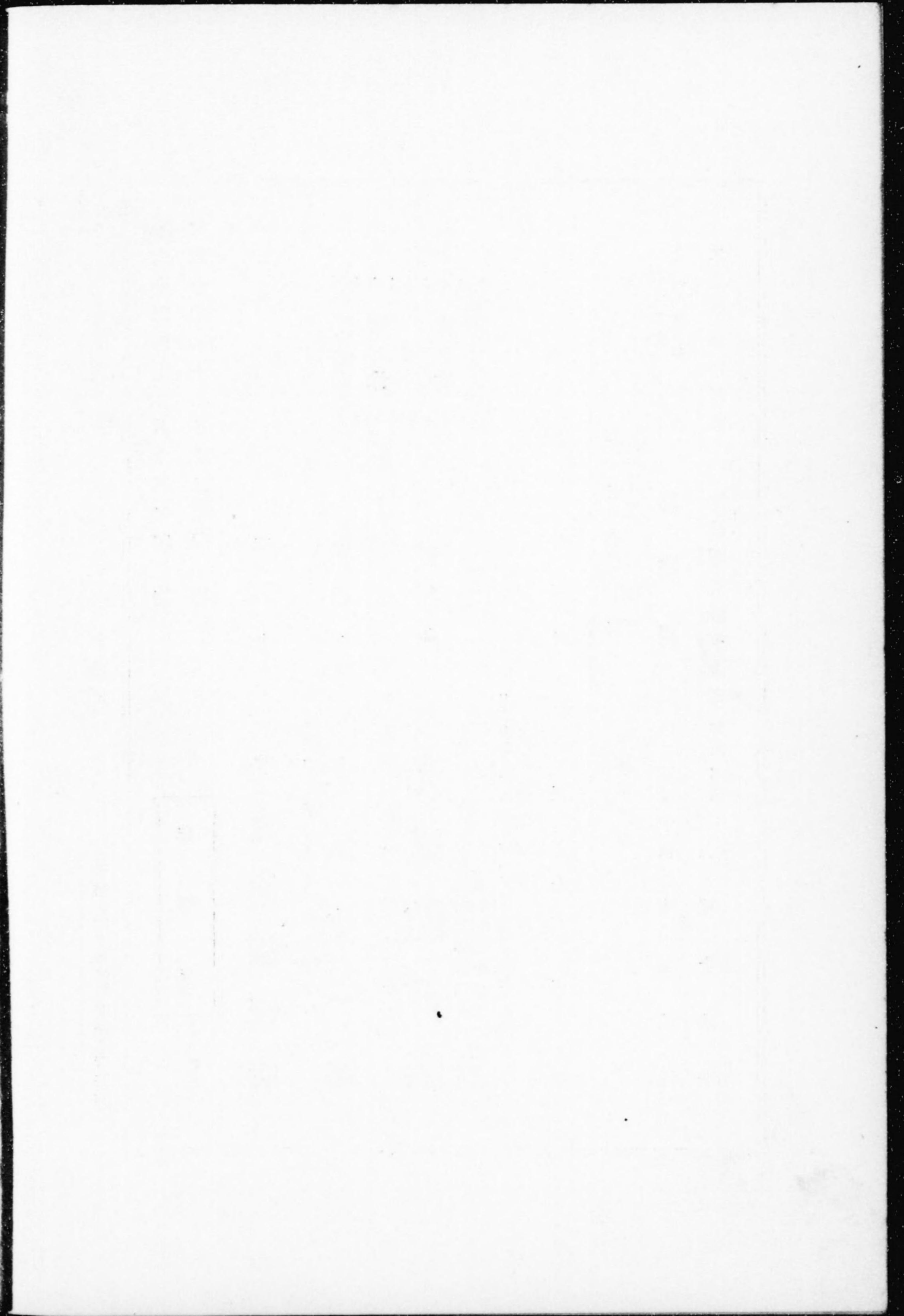
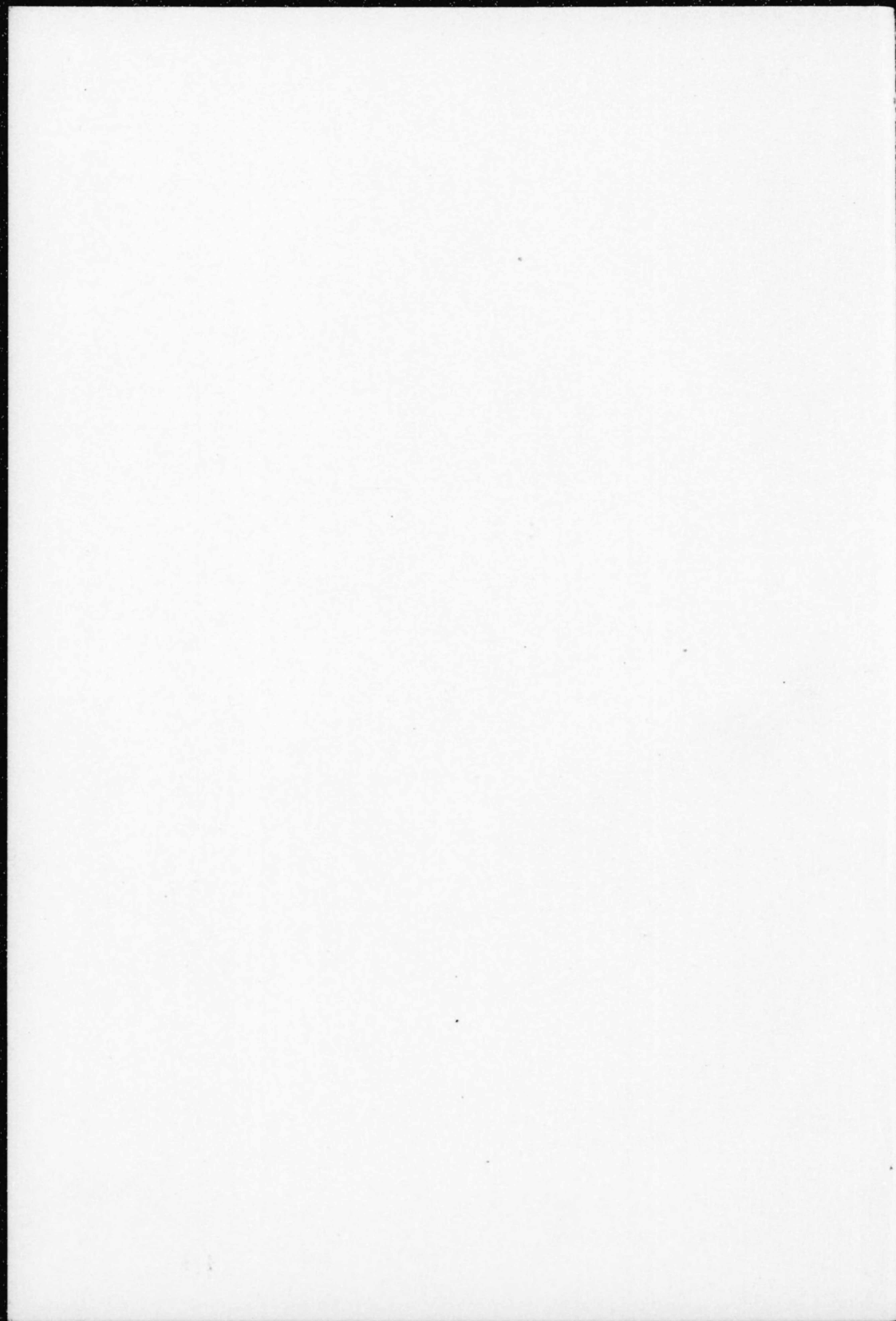
光風館編輯所編

師範國文第二部用

和裝全貳冊

師範國文教授備考第二部用

（非）上製全貳冊



391  
167

